

# キブツの原則

イツハック・マオール  
訳・永井 恵三

## 生活の中で理念を実証する

イスラエルに於けるキブツは、一方に於ては、シオニズムを具現し、国家を建設するという国家的事業を遂行しているが、このことを別にすれば、キブツはこの国に社会主義社会を建設するための一方法と見なされるべきであろう。キブツの重要性は、社会主義の社会理念を日常生活の中で実現しようと努めていることである。キブツの経済と、その社会を建設する上での原則は、次のように定義することができるであろう。

キブツは、一つの組織された社会であり、それは、労働と生活、即ち、生産と消費における完全な共同の原則に基づき、また、全生活空間に於ける全構成員の最大限の相互扶助と相互責任の原則に基づいて成り立つものである。つまり、各人の独自性と精神の自由を

尊重し、すべての人の平等と、あらゆる労働の価値を等しく考えるという原則を認識することに最大限の努力をすることである。

この要綱を各要素に分解してみるならば、協同、労働、平等、自由、連帯（相互責任）、友愛（相互扶助）、等々で、これらは根幹とも言うべきキブツの基本原則である。これらの基本原則を実行し、具現するのに幾つかの方法、手段がある。

例えば、全生活空間に於ける相互責任の原則を考えてみよう。ここから派生する原則の一つが、子供に対するキブツ集団全体による教育である。さらに、老いた親及び近親者等への扶助である。

各原則を実現する為の教育は、キブツ内では特に重要である。しかし、キブツの原則が、キブツで

育ちつつある若者のみならず、イスラエルに育ちつつある全世界の教育の基本として貢献できると誰が確信できるか？ この質問に対する明確な答は、ヨセフ・ブツセル（キブツ運動の創始者の一人）の置いた指針の中に見出される。たとえ多数の民衆が、その生活の型に馴れずにいるとしても、人が自らの全魂を傾けたときのみ、ある一つの生活形態は模範となることができる。別のいい方をすれば、もし、他の人々に理解して欲しいと思えば、まず第一に、自分自身に、自分の生き方に、そして自分のドクトリンに正直であらねばならない。そして、その行動指針に忠実であることである。もし、そのように行動するならば、疎遠だった人々の心中に、ささやくことができるだろう。そして、たとえ彼等が内に加わらなくても、また、そこで生活する用意がなかりとも、彼等は、キブツ社会の光明に照らされんと願うであろう。個人集団にかかわらず、この条件こそすべての教育者が主張するところである。

「我々は、我々が望むと望まざるとにかかわらず、先駆者（パイオニア）なのである。」ヨセフ・ブツセルはつづける。「キブツの概念は全く新しいものである。我々の全生活が

には、何物も要求するな。善良で正直な人とは、人から取る以上に多くを与えることである。」



一つの偉大な革命なのである。」それゆえ、キブツの中には先駆者理念が底流として流れ続けているのである。つまりそれは、毎日の生活を通して実証していくという社会革命の概念の中に流れ続けているのである。ところで、何事も努力なしには成し遂げられるものではないから、我々は、一旦事ある時には、流れに逆らって泳ぐだけの力と精神的勇気を持たなくてはならない。しかし、それが決った原則であるかのように、いつでも時流に逆らって泳ぐという事ではない、が、しかし、我々の原則及び考え方が、時流の中に育まれ得ない状態のときには、先駆者、あるいは革命家として、我々の目標及び社会目的に向って自ら努力することが義務となる。「時代の精神」の中には、当然受け入れるべきものが沢山ある。つまり、進歩、工業、技術、現在知識、専門的訓練、高等教育等である。これは、すべてキブツにとっても重要な事柄である。しかしながら、こういうものだけでは有効に働かない。ヨセフ・ブツセルのいうように、精神と魂もまた我々の源動力であるからだ。この意味で、我々は社会革命の先駆者たり得るのである。

利他主義は、キブツの潤滑油である。キブツの偉大な革命なのである。」

## 平等と努力

平等の原則に対して、最近、全面的攻撃を行なったキブツメンバーの若者の意見には、私は反対である。彼は書いてある。「誤まった平等原則概念がキブツにもたらした、あるいは、これからもたらすであろう損失の大きさを誇大に受けとっているわけではない。」あるキブツメンバーの利己的な行動のために、平等原則の実現の可能性に絶望して、彼は「努力による平等」を提案する。「能力に応じて働き、必要に応じて受けとる」という今までの共同社会原則を破棄して、新たな標句「能力一杯の働きをしなければ、必要以下ものしか受けとれない」に置き換えることを求めている。

この提案は、キブツにはそのメンバーをより高い道徳水準まで引き上げる能力がないという不信から派生したものである。キブツで自己の義務を充分果さないメンバーは、それ程多くいるわけではない。彼等は、原則の例

ツは、その三大要素、即ち、経済的支え、キブツの実生活、キブツ運動、の上に成立する。これら三者は本当は一つである。無理に分離すれば、その意味を失なってしまうであろう。経済もキブツの原則に従わねばならない。キブツの経済と生活は、手に手をとって進み、この両者はキブツ運動の理念、組織、運営能力によって左右される。つまり、キブツ運動は各キブツに対して統制を行ない、また援助を行なう。

ある人が、最近次のような質問を出した。信義に関わる如何なる綱領も、罰則のみならず除名の命令を含み持っている。後者は罰則以上に、綱領の保持にとつてなくてはならないものである。それではキブツでは、いったい何が「汝犯すなかれ」なのか？これに対する答はこうである。キブツ生活においては、全綱領の要として、ひとつの「汝犯すなかれ」がある。即ち「汝、利己に走るなかれ」である。利己主義者であってはならないのである。何故なら、キブツは決して利己主義の基盤の上に建設されないし、また機能することもできないからである。トルストイは、個人の守るべき道義的要請を次のようにまとめた。

「人は、他人につくし、そして与えよ、自分外とも言うべき人達であるが、高度の公明正大観でこれを防ぐことはできるはずである。これら少数の人達のために、消費に於ける平等原則を破壊するよりも、むしろ反対に、キブツ内の衆人監視性を強めることによって、平等の原則を保持しつつ解決するべきであろう。キブツに客観的な物差があつて、各メンバーの能力を評価することができると考えるのは誤りである。一步譲つて、理論上キブツが各メンバーの能力を知っているとしても、そのことで決定的な失敗を犯すことになるだろう。それは、個人に対する暗黙の批難を引き起すことになる。キブツのメンバーに対して、キブツによって引き起されたかような不正の一つは、利己的なメンバーが責任回避することによって引き起す損失の何十倍にも匹敵する損失であると言つても過言ではないと思ふ。」

## 他への思いやり

この問題は、各人の道徳水準、真の友人関係をうながすものとしての主観、他人及び自己への洞察、人と人との平等に対する考え方

等に係わっている。これらの諸価値は、どんな社会に於ても必要とされるものであるが、都市社会で普通の生活をして行く上では、ほんのわずかな部分が要求されるだけなのに対して、キプツに於ては、これらの諸価値がキプツ存在の必要不可欠な要素として要求されている。

「人間には自己本位な一面がある」というのは公理的であり、誰もこの理を超えることはできない。たとえ聖賢と言われる人であろうとも、利己的要素を全く持たない人など考えられない。高貴で洗練された社会があつたとしても、人間生来の性格を無視することはできない。最優先に、人の守るべき道徳であるところの『汝と汝の隣人を愛せよ』でさえも人間の利己的要素を無視するものではない。即ち、利己を完全に滅却せよと要求するものではなく、ただ単に利己を自制せよと教えているのである。これが我々の言う『汝自身であれ』である。これは『自己本位』ということとを考慮しているであつて、嘆く必要は全くない。しかしながら、いったい何が、この『理解度』の尺度たり得るのか？



がどのような社会であろうとも、決して社会に於けるその人の立場を保持することはできないであろう。どんな傾向の人であつても、社会と彼の仲間の要求に合うように、ある種の社会機能を果さねばなるまい。このように人とその仲間との関係に於ては相反する二つの性質がある。一つは『自己本位』であり、もう一つは『他人本位』である。これら二つの性質は、たいてい相互対立した関係で見出される。つまり、ある人が自分と他人との溝をなくしようと努力すればする程、彼自身から離れて行く。逆もまた然りである。生活の場に於ては、この関係は二つの違った方向に表われる。普通、標準的な型は、自己に傾きすぎる傾向にあり、望ましい型として、他人を強調するといった形で表われる。しかし、望ましい型と言えども、また標準型も、もちろんそれほど疎遠なところにあるのではない。要請されることは、まさに『汝の隣人を愛せよ』なのだ。それでも、他人を顧みることが実質上皆無といった例を、それも身近かなところに少なからず挙げる事ができる。こんな場合には社会は反対を表明し、過度の利己主義に有罪判決を下す。

キプツでは、このことをどのように考えて

会をたちまち分散するし、少なくとも下降の一途を辿ることになるだろう。  
アロン・タビッド・ゴルドンがキプツのことについて「大事に対処する如く、小事にも一生けんめいであれ」と言っている。多くの人は、中心課題については、格調高く、他から賞讃されるべく行動できるが、小さな事柄にも誠意をもって臨むことは、その人の力量を超えなければできないではない。キプツに於ける我々の日常生活は、あらゆる種類のこまごまとした事柄で埋まっている。そして、そこにはいつも、それらのこまごまとした事柄を軽視する危険が存在する。これは、キプツの社会生活に於ける一つのマイナスの要素であり、我々にとって、小さな事柄に対して如何に誠心誠意対処できるかが、非常に重要な問題となる。  
権力に対する願望が、人間の心の内にはある程度見られるものである。キプツメンバーの生活は、かなりこまごまとした事柄の上に成り立っている。キプツ生活のある部門に責任を持つている人には、仲間のメンバーに対して影響力をもつ機会がある。相互に話し合う時の話し方こそが、人と人との関係を円滑にする重要な要素になる。キプツに於ては、他

いるのだろうか？ 真実を語らねばならない。ここでも他のあらゆる形式の社会の場合と同様に、二つの異なる性質を同じような比率でもっている。平均的に言えば、キプツの人達もまた普通の人間である。まさに血と肉からできている被造物であり、いづれは死すべきものである。他の社会の人々と少しも変わるものではない。違うのは、キプツの社会構成が、他の社会よりも、個人に多くを要求し、仲間のことを顧みるようにしていることである。これは、一般に精神的権威がキプツの中に働いている所でのみ達成される。しかしながら、この精神的権威の要素を持たないキプツは、極端に利己的な性格を押えることができないだろう。精神的権威は、個人的である場合と、集団的である場合とがある。前者の場合には、一人あるいは数人の強い威威のある人格の影響によって、精神的権威が表われるし、後者の場合には、大衆の意見を通して表われる。そして、これら二つの結びつきがうまくいっている時が理想的な状態であると言えよう。しかし、個人による精神的権威が、必ずしもどこにでも、いつでも存在するわけではなく、衆人の意見による高度の警鐘が必要とされる。これなしでは、キプツ社

のどんな社会よりも、はるかに社会的な安全を全生活空間で、最高度に享受できるものであるが、もし、思いやりの要素が欠けた場合には、そこでの生活は非常につまらないものになるだろう。はたしてこのことに対して、常に充分な注意が向けられているだろうか？ 常に肯定の答であつて欲しいものである。

キプツに於ては、その独特の生活形態と生活条件のために、他の社会に於けるよりも、一層高度の洗練された人間関係が必要とされる。もし、それがなかったならば、各人は心理的に困難な状態に直面し、相当苦しまねばならないことを知るであろう。それゆえ、キプツ社会は、人々の自尊心を傷つけるような事柄に対しては、一致して断えまなき努力をしなければならぬ。すべての精神的な力を動員して、すべての人が全人類の視野のもとに擁護されるようにすべきである。

これらの要求に呼応して生きるために、キプツメンバーは、確かな内面的な教養を身に付けなくてはならない。もしも、そうでないならば、私の見解では、その人はキプツのメンバーとしてふさわしくない人であるということになる。

# キブツにおける自由と平等

バルフ・アザニア 訳 山崎雅代

## 相互責任

キブツ生活に於いて、特に重要なことは、徹底した相互責任が基本原則になるといふことである。相互責任とは、相互援助と同じものではない。この二つは、その質においても量においても異なる。ある人が、病気や家族の事情、或いは他の不都合な理由で仕事を休まなければならぬ時、相互援助によってその人を救ってあげることができようであろう。しかしながら、お互いに助けあうことがその人に完全な平等を与えることにはならないし、返って、ここに問題が生ずる。

相互責任ということを基底にしている社会主義でさえ、当然、人間の内的感情のくい違

いをなくすることは出来ない。キブツでは七〇才の人も四〇才の人と同じように満足感を持っているかのように思い違いされがちだ。キブツにおいて、年配者は若者同様すべての生活必需品が、例えば、食料、衣類、住居などを供給されるが、ここに根本的なむつかしさがある。それは、自分が共同生活にどれだけ貢献しているか、という自らの評価である。キブツでは、他人と自分との客観状況の違い、つまり労働能力に関する年配者と若者との違いに對して、年配者が完全に精神的負担を感じないというまでには、まだ到達していない。

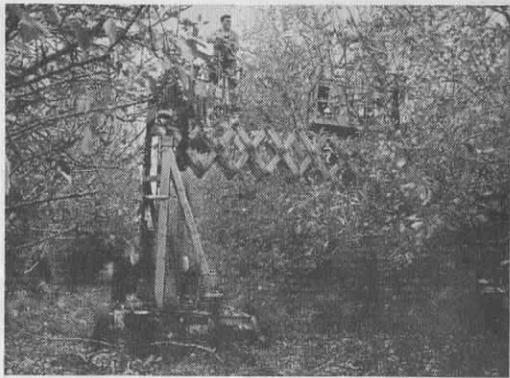
相互責任の考え方は、人間が自己の生活を維持する能力は、その人の労働能力次第で決まるべきであるとする考え方が間違っている、とする社会哲学に基づいている。キブツにお

いては、誰でもが、日々労働する中で、自己の能力いっぱい働けるように、肉体的な能力と、働く意志との区別をはっきりするようにならなければならない。

相互責任という考え方は、人間の生存権利と、仕事の場であるところで努力することを別々に切り離して考えない。そして、キブツは気まぐれに怠けるようなことを最も憂慮している。

## 資本主義に直面するキブツ

キブツは、資本主義社会にとり囲まれており、その資本主義社会というものは、キブツの持つ相互責任の原則とは全く反対の社会哲学を持っている。その哲学は、人間は、その



果樹園の剪定作業

業績は実る）は直接結びつくものと考えられている。さらにまた、資本主義体制下では、不合理にも、肉体的能力よりもはるかに知的能力に価値が認められる。世界中の社会主義制度の国家でも、すべて、肉体的なものよりも、知的活動に価値が認められており、その考えは、資本主義的思考に基づいているものである。

キブツの教育の仕事でもっとも難しいことは、資本主義下で、自分は他の人より多くの機会が持てると思っている人間を、彼の個人的な生活の中でも、よろこんでキブツ生活に志向するようにすることである。

新しい社会を目指す者の細胞は、人々をその細胞と提携し、より大きな体制であり、かつまた自己を正当化する資本主義と競争もしていないかねばならないことを教えないければならぬ。資本主義社会が、存在する限り、熟練した個人が、自分にとって、キブツのどこがいいのかを考えるように仕向ける必要がある。おそらく、キブツという社会は、生産能力に欠ける人々にとってはよいものだろう。しかし、すばらしい才能がある人々にとっても、キブツは、決して悪いものではないということとを理解させねばならない。

この理想的な問いかけにつけ加えて、さらに客観的に見た場合にも、キブツの生活と個が結びつき、提携して行くことを助ける要素がある。それは、資本主義下に慢えんしている社会不安とは逆に、キブツでは全く安全である。資本主義の体制下では、多分三〇才の人は、その能力と時代の経済のブームにのって、大きな業績をあげることが出来るだろう。

しかし、時がたつにつれて、だんだんと肉体は衰え、不振を乗切ることもむつつかしくなつて来る。けれども、キブツの生活においては、どんなに個人的に逆境にあるうとも、また経済が不況になろうとも、仲間よりも自分だけが苦しむ必要はなく、社会保障が徹底している。人間は、年をとるまでこういうことについて考えないという所に難しい問題がある。若いうちは、ばく然とこういう事を考えているのだが、そんなことではいけない。社会保障の価値が、年をとってから、生活の急激な変化によって理解されるようなケースがいくつある。

## 生産と経済

世界の民主社会主義は重大な問題をかかえ

人の能力と才能に比例して、すべてのものに對して資格を有することになるといふものがある。だから、くつひも売りの少女が億万長者になり得るわけである。そして、親の財産を相続するのを全く正当とする封建的風潮が次に登場する。そして、浪費家の遺産相続人が、その財産を浪費して、いつまでも金持ちでいられず、社会の富は、常に再分配されると言われている。人間の業績（富、安全性、地位）と、実際の働く能力（働けば働くほど



野菜畑の作業風景

ている。即ち、どうやって労働者が国の経済及び生産に対して、直接責任を感じ、それを担っていくことができるか、ということである。世界のあらゆる社会主義運動が、この問題の解決に努力しているか、これにはキブツが最も大きな役割をはたすのではないかと思われる。

キブツでは、労働者が、その社会の成長に

て繁栄させ、窮極的には全メンバーの間に相互責任の意識が、完全に浸透したキブツ生活を出現させた。そして、ここではもう一度、徹底した相互責任だけが、最大限に人類の平等を保証するものであることを強調したい。

また、相互責任の考え方は、ひとりて身に付くものではないということは無視してはならない。生産物、共通の財産、人間関係に対する全体責任という方向へ、個人の教育がなされなければならない。そして、このことがキブツの教育の基礎となっている。長い間にわたって、キブツの子供達には、そうした教育が行なわれてきた。教育のみが、キブツの子供達を未来の正しい社会の確かな担い手として育てることができ、決して無秩序な、そして、仕事や財産や人間関係について無責任であることを習慣づけるようなことをしない。

多くの人々が、平等と自由との矛盾に苦しむ必要のない社会主義的な制度を求めてきた。しかしながら、無制限の自由は、強者のための自由に陥りやすく、我々が理想とする平等の考え方に矛盾する。また、我々は、自由のない平等は、我々が考える社会の内容と相反することも知っている。それどころか、自由

最大限の責任を引受けているばかりではなく、場合によっては、その設立や運営にも従事する。確かに、日常生活を営んでいく中で、その原則を実行する場合に問題はいろいろある。どのキブツでもメンバーの直接責任を実際に行なう場合、キブツの社会生活や、経済面の運営に必要な人を選ぶ際にむずかしい問題がある。しかしながら、世界の他のところで経

のない平等は、平等そのものをも、危くしてしまう。長い間の自由の喪失は平等を危くしてしまうものだ。また、長い間の自由の喪失は、不平等から遠ざかることを進めて来た社会に於てさえも新たな不平等を生み出す原因になっている。

イスラエルのキブツは、ユニークな社会主義生活の形態をとっており、そこでは、ゆるぎない平等と最大限の自由が保証されている。キブツに於ける自由と平等の結びつきは、キブツをとりまくどんな社会よりも成功している。

シオニストとイスラエルの社会主義者の間には、相互の目的において、強いきずながあり、それは、キブツにおいて最も良く表現されている。イスラエルの社会主義は、シオニズムに内在する民族の独立と、労働者を助けて社会復帰させ、国全体を、働らく者の社会にすることを目的としている。キブツは、再建のイスラエルに果たした役割を通して、世界の歴史に一つの具体的成果としての位置を占めるものである。多分、キブツ内の人々よりも、外部の人々が、このことをよりよく理解しているだろうし、世界の人々は、今なお歴史的にも社会的にも、ユダヤ人の国で、独立

済が国有化され、賃金労働者によってまかなわれている所と比較するならば、キブツでは、集団経済の中で、労働者の責任は、はるかに大きなものである。

前にも述べたように、すべての共同体は、そのメンバーに対して、その共同事業に対して、直接責任を持つことを要求する。キブツはこの点において他の共同体と違う所がある。つまり、キブツでは、その共同体の利益だけを守ろうとする集団エゴを最小限に食い止めている。それには次の二つの方法がとられている。

A 相互責任を広め、キブツ内の相互扶助を確立し、国家的組織を通して達成する。

B 国の政府と、労働者の決定事項を、総合的にコントロールするためのキブツの協定に基づいて活動する。言い換えれば、共同体内における個人的な利己主義が最小限度に縮められるように、国家との関係においても、共同体自身の利己主義は、自主的に縮小される。

我々はキブツが、単に共同生産をするだけではなく、共同消費の場であることを忘れてはならない。そして、その共同消費は、簡単な社会保障の整った社会から、相互扶助を通じ

したユダヤ人生活を再建することが妥当かどうかを論議している。ユダヤ人の伝統は、単にその個人の責任ばかりでなく、社会の一員としての個人的責任を強調する。このように、世界の人々は、キブツが一つのユニークなユダヤ精神の本質を表わしたものであり、社会主義とシオニズムの総合体として最も良い例だと思っている。

二〇世紀は、人間が暴力や抑圧によらないで、自由と平等を達成した生活を求めて、その魂は奈落の底をさまよっていることを暴露した時代で、特にキブツのメンバー達がこの時代に奇蹟を行なったのではない。つい最近までは、西洋のみがキブツに興味を示した。けれども、現在では、アジア、アフリカの各地で独立を獲得した国々の代表が、彼等の社会の新しい生活様式を考えその解決の糸口をみつけ出すため、イスラエルにやって来るといふ新しい現象がおこっている。キブツは、しばしば彼らにとつては、平和な方法で正しい社会を建設した現代の最も独創的な、そして急進的な試みとして受けとられている。これはキブツが世界的渴望を救うものとして注目を集めていることの現われであると言えないだろうか？